

フラット・オントロジーと社会学  
—「モノ」の地位と「主体」の運命—

三 上 剛 史

Flat Ontology and Sociology  
— The Status of “Things” and the Fate of the “Subject” —

Takeshi MIKAMI

# フラット・オントロジーと社会学 —「モノ」の地位と「主体」の運命—

三 上 剛 史

Flat Ontology and Sociology  
— The Status of “Things” and the Fate of the “Subject” —

Takeshi MIKAMI

## 要 約

かつてM・シェラーは『宇宙における人間の地位』の中で、人間が人間たるゆえんの人間の「特殊的地位」は、「精神」を有することにあると述べていた。シェラーが示し期待したような人間の地位は、はたして現代も保持されているだろうか。脱産業化された情報社会において、“Society5.0”などと呼ばれる世界に向かいつつある人間は、もうとっくに「宇宙における特殊人間的」な地位を物質的なものに譲り渡しているのではないか。

本稿では、近年になって台頭しつつある「新しい存在論」(フラット・オントロジー)の持つ意義を社会的に考察し、情報化が著しく進展する社会における人間(主体)とモノ(客体)との関係を再検討する。

フラット・オントロジーにおいては、人間とモノとの関係がフラットなものとして捉えなおされつつあるが、それは人とモノとの境界線が再び曖昧になるということの意味している。〈主体/客体〉図式による境界設定の明確化が近代化の産物であるということの思い起こせば、社会認識のあり方に大きな変化が起こりつつあるとも言える。

フラット・オントロジーの社会的考察は、最終的な着地点としてモノと人間、モノと社会との関係性を再規定するところまで到達せねばならないが、それは人間・主体が何に置き換えられつつあるのかを問うこととしてもある。

本稿では、まず「主体」がどのようにしてその特権的地位を剥奪され、また「人間」がいかにして“終焉”させられてきたのかを確認しておきたい。その上で、人間主体がモノに置き換えられつつある理論的位相として、フラット・オントロジーの意味を改めて検討する次稿に繋げたい。

キーワード：フラット・オントロジー、準主体・準客体、人間の終焉、N・ルーマン、M・セル

## はじめに

「哲学的人間学」並びに「知識社会学」の創始者として知られているM・シェーラーは『宇宙における人間の地位』（1928年）の中で、20世紀初期に次のように語っていた。「人間の本質、人間の「特殊地位」と名づけ得るものは、知能や選択能力と呼ばれるものを超えた高所に位置しており」、人間が人間たるゆえん＝人間の「特殊的地位」は「精神」（Geist）を有することにある（Scheler, 1928, S. 37）。

シェーラーの定義では、「精神」は理性だけではなく、意志的・情緒的な諸作用もまた含んでいる。そしてその作用中心が「人格」（Person）と名づけられているものである。人間は精神的存在者であり、そのことによって環境世界から自由（「否を言い得る者」）であると同時に、自身をも対象化して己の生に対して禁欲的な態度をとり得る存在者（「生の禁欲者」）でもある。

はたしてシェーラーがここで示し期待したような人間の地位は、現代も保持されているだろうか。脱産業化された情報社会において、「ポスト近代」の人間達はパソコンとスマホに依存し、様々な情報のみならず判断力さえもデバイスに求めようとしている。“Society5.0”などの名称で呼ばれる世界に向かいつつある人間は、もうとっくに「宇宙における特殊人間的」な地位を物質的なものに譲り渡しているのではないか。そして、どうしたらAIをより人間らしく作ることができるかという問題に取り組む。

それは言い換えれば、人間とモノとがどれだけフラットな関係になれるかということでもあり、人とモノとの境界線が再び曖昧になるということではないか—〈主体／客体〉図式による境界設定が明確化されたのが近代社会においてであるという意味で。

本稿は、近年になって台頭しつつある「新しい存在論」（New Ontology）の持つ意義を社会的に考察し、情報化が著しく進展する社会における人間（主体）とモノ（客体）との関係を再検討しようとする論考である。

筆者はこれに先立つ論文「『新しい存在論』を巡る社会学ノート—脱人間とモノ志向—」（三上、2020）において、一般に「新しい存在論」と呼ばれている理論的潮流について、その理論的動きと社会学との関わりを探ろうとした。

「新しい存在論」あるいは「フラット・オントロジー」と総称される近年の理論的流れには、B・ラトゥールのアクター・ネットワーク理論、人類学における存在論的転換、哲学分野での「新実在論」や「オブジェクト志向存在論」などがあるが、前稿ではそれらが共通して有する理論的通底項をサーベイしつつ、その現代的特徴を際立たせた上で、現実の社会状況との関係づけを行おうとした。

前稿で注目した幾つかの重要なテーマを簡単に振り返っておこう。まずはラトゥールがM・

セールと共に論ずる「準客体」の理論がある。“社会的なもの”は「非社会的な諸素材における、微妙な変化の内に辿られねばならない (Latour, 2005, p.36)」とするラトゥール（そしてアクター・ネットワーク理論）に見られる、《人・モノ・社会》をフラットに捉える視線である。とりわけセールの言う、「準客体は客体ではない。にもかかわらず、それは客体の一つである。…それはまた、準主体である」(Serres, 1980, p.403) といった、一見、矛盾するような指摘の持つ意味がより深く検討されねばならない。

これらは人類学のいわゆる「存在論的転回」とその視点を共有するものであるが、例えばA・ヘナレの『物を通して考える』やM・ストラザーンの主張がある。ストラザーンは、〈主体／客体〉の二分法が先にあるのではなく、「自由に使える道具を通して我々はその用途に気づくのである」(Strathern, 2004, p.40) という、客体によって主体が形作られる側面への注意を促している。

我々はここで、アクター・ネットワーク理論と人類学に通底する「モノそのものへと突き進むことを要請する」(Schulz-Schaeffer, 2000, S. 195) 態度に注目したいが、それだけではなく同時に、このような観点がストラザーンとラトゥールという「二人が期せずして同時期に導入した革新的な議論」(春日, 2011, 14頁) であるという事実が重要である。これらの同時代性は知識社会的には何を意味しているのか。その点が興味深い。

そのような知識社会的関心は、哲学・思想領域における「新しい存在論」の台頭によっていっそう高められる。フェラーリスの「新実在論」、メイヤスの「思弁的実在論」、ハーマンの「オブジェクト志向存在論」などの理論である。

M・フェラーリスは「ポストモダニズムからリアリズムへ」を標語として、デカルト-カント以来の構築主義を批判し、またフーコー的な「知=権力」論も批判しつつ、「モノは思考によって構成されるのではなく、思考が生じる以前に与えられている」(Ferraris, 2015, p.146) という観点を強調している。そして「認識論的現実」(Realiät) と「存在論的現実」(Wirklichkeit) を区別し、「リアリズムとは、自然的対象は…我々がそれを知る手段から独立しているという信念である」(ibid., p.150) と言う。

Q・メイヤスはこれに「プトレマイオスの反転」という論点を追加し、カントが哲学的認識において唱えた「コペルニクスの転回」は、実際には「逆に、主観・主体が認識過程の中心にある」(Meillassoux, 2006, p.175) ということであって、自然科学的認識においてコペルニクスが遂行したことの逆だと指摘している。

G・ハーマンもまた、一部メイヤスと観点を共有しながらも「外的世界は人間の意識から独立したものとして存在している」(Harman, 2018, p.10) という点を強調している。そして、モノ自体へのアクセスを模索するメイヤスの立場はまだ「人間が中心に留まっている哲学」の域を脱していないと述べている。更にハーマンは「上方掘り崩し」という概念を導入して、ラトゥー

ルの理論は「対象同士の相互関係だけがあると見る」ものであり、オブジェクトそのものではなく「それが観察者に対していかに現れるか」だけを問う姿勢だとして批判する。

これらのフラット・オントロジー諸理論は、それぞれにモノそのものへの志向性を強めているが、ここで社会学が追究したいのは、フラット・オントロジー諸派の存在論的議論についてその妥当性を吟味することではない。“モノ志向／人間志向”、“客体／主体”、“準客体と準主体”などの概念が両義性を抱えたものであることを踏まえつつ、何ゆえに今、モノ志向が高まっているのかを問うことである。

そこで、いわゆる「ポスト・ポストモダン」期の理論に求められる特性や、現実に行進する情報社会の進展（「Society5.0」など）との関わりを考慮に入れながら、前稿では、人間とモノとが存在論的にフラットな関係に置き換えられつつある姿を示唆するところまでは辿り着いた。

最終的に浮かび上がった中心的論点は、＜主体とモノと社会＞との関わりを再検討するというテーマである。現代社会における理論的・現実的なモノ志向を、「人間」や「主体」の概念にまで遡って考え直すことが次の課題として設定された。

このテーマを主題に据えて次の論文が執筆されねばならない。フラット・オントロジーの社会学的考察は、最終的な着地点としてモノと人間、モノと社会との関係性を再規定するところまで到達せねばならないのであり、人間主体がモノに置き換えられるということの意味が検討されねばならないのは確かである。

しかし一足飛びにその主題に向かうのは得策ではない。その前に整理しておくべき論題がある。人間と主体がモノに置き換えられつつあるにしても、理論的には「人間の終焉」「主体の脱構築」などの理論史がある。そこで行われていた理論的営み、そしてそれを下支えしていた現実社会の動きについて、少し丁寧に跡付けしておく必要がある。

人間や主体が何に置き換えられつつあるのかということを検討する前段階として、まず「主体」がどのようにしてその特権的地位を剥奪され、また「人間」がいかにして“終焉”させられてきたのかを確認しておきたい。その上で、人間主体がモノに置き換えられつつある理論的位相として、フラット・オントロジーの意味を改めて検討するという手続きを踏みたい。

## 1. 人間と精神—「物質的なもの」による置き換え

### (1) 産業社会と「精神的なもの」

導入としてA・グルドナーの『社会学の再生を求めて』（1970年）から一文を引用しておきたい。これは産業社会の発展の行く先に新たに見えはじめた、いわゆる「脱産業社会論」が台頭する時期の著作である。

現代の産業社会は「それ以前の社会ほど、そのシステムの安定性を維持するために“精神的” (spiritual) である必要はないのである。というのは、実際のところ産業社会は、精神的なものを“物質的” (material) なものによって置き換えてしまったからである」。(Gouldner, 1970, p.276)。

ここで我々は、グールドナーのこの命題を21世紀の現代社会に拡張して応用しなければならないだろう。「産業社会」と「物質的なもの」との関わりで生ずる「精神的」なものの変容について述べられていることを、「ポスト産業社会」(=情報化された消費社会：ポスト近代)においてもより強く作用する出来事として捉えなおさねばならない。

もちろん、この記述は主流社会学理論の規範主義的志向性を批判する文脈で現れるのであり、E・デュルケームとT・パーソンズに顕著な規範主義に対するアンチテーゼとして発せられた見解であって、「物質的なもの」それ自体をテーマとしている訳ではない\*。

\*グールドナーの指摘する「アメリカ社会学にある道徳的価値の重要性に関する圧倒的合意」は、社会学一般に当てはまる傾向である。似たようなタイプのパーソンズ批判としてA・ギデンズのものがあるが、ギデンズの場合にはパーソンズの矛盾を「主体」と「構造」の矛盾に見ており、より人間主義的な理論的志向性に基づいて、再帰的な「作り、作られる」というプロセスに積極的に関わることを主張するものである。

ただ、行為主体の重視という点ではパーソンズ図式の主意主義とそれほど大きな違いはないのかも知れない(同じではないが)。依然として価値規範の潜在的共有に依拠しているように見えるギデンズやU・ベックに比べれば、「道徳は“プライベートなもの”になっている」というグールドナーのほうが論旨に筋が通っているように見える。

言うまでもなく、現実の社会における「物質的なもの」と「精神的なもの」の変容は、社会学理論構成における規範主義的態度の妥当性とも大きく関わっている。ただ、本論ではそのような理論構成を直接に論ずることからは距離をとりつつ、(〈主体／客体〉図式という観点から見た)モノ志向と人間精神との関わりについて、社会学的な検討を行いたい。

ここでグールドナーが「精神的なもの」と呼んでいるものの具体的中身は、典型的には「道徳」であるが、そのような意味での「精神」性、すなわち、産業社会の人間が「精神的」でなければならなかったことを早い時期に示唆していたのは、M・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。ウェーバーの場合には「正当な利潤を、“召命として”(berufsmäßig)、組織的かつ合理的に追求する」精神的態度を「(近代)資本主義の精神」と名づけた(Weber, 1904-1905, S. 54)。

よく知られているように、そこでは主に経済と宗教との“親和性”が問題とされていたが、その後の社会学の展開で精緻化されてきたヴォキャブラリーを用いて表現すれば、近代社会は「規範主義」的構成によって成り立ち、そこに生きる近代人は「主意主義」的行為主体であったということである。

前者の、規範的構成はデュルケーム社会学以来の社会学のメインストリームが維持し続けてきた理論前提であり、後者の主意主義については、その後にパーソンズが、デュルケームとウェーバーを総合する形で20世紀社会学の主脈を構成した際に強く主張した論点である。

グルドナー以降のアンチ・パーソンズ的 sociology 批判は、後にいわゆる「ポストモダン」思想と合流し、近代的主体への批判と規範主義的社会構想の見直しという道筋を経て現代に至っている。この間のポストモダニズムや脱構築、近代批判の思想群、そしてその社会学版ともいえる J・ハーバース、N・ルーマンならびに A・ギデンズやそれに続く U・ベックの所論について、ここで再び細かく言及するには及ばないであろう—この点については〔三上、2003〕で詳しく論じている。

本稿が目指すのは、そのような近代批判、主体批判の行き着く先に現れた、近年（とりわけ2000年代になってから）の「フラット・オントロジー」、「新しい存在論」などと呼ばれる理論思潮が持つ、明確なモノ（客体）志向の検討である。なぜ今、モノに志向する社会理論が頭をもたげつつあるのか。モノ志向の重要性を論証しようとする哲学的視点が台頭しているのはなぜなのか。この点を問題にしたい。

## (2) 「主体」の内面性

グルドナーが言ったような意味での産業社会（＝近代）における人間の「精神」は、社会学理論的にはパーソンズの言う主意主義的行為「主体」として整理されていた。だが、その主体の精神構造は、ウェーバーからパーソンズに引き継がれたものとは異なる、もう一つの側面をも持っている。

ウェーバーが「資本主義の精神」と呼んだものの本質的要素は、ピューリタンの禁欲主義と同一のものであったが、「世俗内禁欲」に加えてもう一つ、キーワードになるのが、M・フーコーの「パノプティコン」である—（これに R・ローティが言うような「心」と「内面」の発明という論点も付け加えて論じておくのが望ましいが、今はそこまで拡張する余裕はない）。

近代的な個人（自律的主体）はパノプティコンに代表される規律と監視の構造を内面化することによって、規範（＝社会）に従属することで主体として完成したというのが、よく知られているフーコーの指摘である。

「自らの責任で権力による強制を引き受け、自発的にその強制を自分自身に働かせて…自分が

自分自身の強制の源となる」(Foucault, 1975, p.204)。我々はそのような、人間を「教育」し統制する学校や軍隊、そして「矯正」する監獄などの背景に、近代産業社会の隠された意図があったこともまた見落としてはならない。

この「規律訓練型」の権力は、人の内面を作ることによって社会を統制するというテクノロジーを行使するのであるが、パノプティコンの構造は、実は個々人の自己アイデンティティと同じ構造をしている。自分の中に自己の中核が存在し、それがさまざまな「何々としての自分」をコントロールする。そのような、一望監視施設を自分自身の中に持つ人が、社会規範に従順で自己コントロールのできる自律的個人主体であった。

このようにして作られた人間達は、義務を果たし、自ら高い目標にむけて禁欲的に努力する近代産業社会の人間である。そういう意味で、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『監獄の誕生』は、近代産業社会を生んだ自己抑圧的・禁欲的主体がいかにして形成されたのかを問う二種類の重要な視点を提供している。リースマンは近代人の自己監視的性格を「内部指向型」(inner-directed type) と名づけた\*。

\*リースマンは「内部指向の一つの現れ」として「プロテスタントの倫理」を見ており、次のようにも述べている。「内部指向的なピューリタンは、常に自分をしっかりと維持していなければならないと感じていた。絶えざる覚醒と意志の力がなければ、自分がどうなってしまうか分からないと考えていた」(Riesman, 1950, p.124)。ちなみに、リースマンの内部指向の“指向”はdirectedであってorientedではないので、「志向」ではなく「指向」という訳語を当てて区別しておく。

ウェーバーとフーコーが明らかにした精神の構造、そしてリースマンの「内部指向型」に典型的に示されていた自己監視の人間精神の構造は、言うまでもなく近代産業社会の“主体的に行為(労働)する”人間の心性である。それは(純然たる客体としての)素材と向き合い、意図と目的をもって働きかけ、(素材と人間の間にある)「機械」と「制度」の規則性に従って自らの行為をコントロールする生産人の精神である。

しかし「産業社会」が終焉を迎え、情報化された消費社会が進展する中で、労働することよりも「消費」が大きなウェイトを占める社会になると、この図式は崩れてゆく。規律訓練型のアイデンティティ人間と産業社会とがうまく噛み合い機能する時代は過ぎ去ったと言うのが、一般的な時代診断であろう。



## 2. 弛緩する〈個人と社会〉の結びつき

### (1) 主体という「ゾンビカテゴリー」

グールドナーの主張の要点は、(1) 生産力向上のおかげで、ゼロサム・ゲームを演じなくてもよくなった産業社会は、その体系を維持するために「精神的」である必要はないということ。

(2) また、技術的に発展を遂げた文明は、道徳というレトリックに頼ったり、道徳的感情を動員したりしなくても、目標とするパフォーマンスを達成できるようになったというものである。それを一言で表せば「精神的なものを“物質的なもの”によって置き換えてしまった」という表現になる。

ところで「精神的」なものの後退は、「物質的なもの」による置き換えとして直接的に論ずるよりも、《システムと個人の分離》という観点を中間に挟んで再考するほうが分かりやすい。社会の全体的構図、社会と個人との特殊現代的見取り図を描くには、システム理論的考察のほうが適しているからである。ここではN・ルーマンを中心とするシステム理論の展開が参考になる。

ルーマンは現代社会の構造を彼独自のシステム理論で明確化してきたが、もちろん、それ以外の社会学者も異口同音に現代社会の変容を指摘しはじめている。依然として「社会は一個の道徳的存在である」というデュルケーム的な観点に立つ社会学派も多いとはいえ、近年ではその観点を脱する動きも顕著である。

例えば、パーソンズ＝ルーマン的なシステム理論の学派には属さないフランスのF・デュベは、次のように指摘している。

行為者と制度は、もはやただ一つ論理に還元することはできないのであり、「個人の主観性とシステムの客観性は別れたのである」(Dubet, 1994, pp.12f.)。個人と社会は同じ程度に自律したシステムとなり、「行為者とシステムは別れたのである」。

近代社会における〈個人と社会〉の関係は、社会規範を内面化しアイデンティティを保持した個人が主体的に行為し、また相互作用しつつ、それによって社会が再生産されかつ進歩・発展するという構図の中にあつた。20世紀社会学を主導した理論(典型的にはパーソンズ理論)はこういう理論図式を下敷きにしている。社会学のみならず、E・H・エリクソンの社会心理学などもそうであつた。

だが、このような形で個人と社会が緊密に“結びつかねばならない”位相は今や終焉しつつあるのではないか。以下で、ギデンズ＝ベックの図式を批判的に参照しながら、この点を明確化しておきたい。

よく知られているように、ギデンズそしてベックは、伝統的社会集団からの解放としてあつた

「第一の近代」に対して、近代的な中間集団（家族、組合、国民国家など）からも個人が解き放される「第二の近代」「ハイ・モダニティ」が進行しつつあると見ている。

ギデンズの用語を用いるなら、個人は伝統社会から「脱埋め込み化」（disembedding）された後に、新たに近代社会に「再埋め込み化」されることで近代的個人となった。ところが、現在、進行しつつあるのは、再埋め込み化された近代的中間集団がグローバル化とポスト近代化に晒され、その意義を失いつつあるという状況である。個人は、近代化の過程で再埋め込み化された集団から更にまた脱埋め込み化されつつある。ギデンズの理論を概略的に整理すればこのような内容になる。

それゆえにベックは、家族・階級・近隣関係などの第一の近代に形成されたカテゴリーは「個人化によって、すでに死んでいるが、依然として生き残っているゾンビカテゴリー」となっている（Beck/Beck-Gernsheim, 2002, p.203）と言うのである\*。

\*ここで見逃してはならないのは、個人化論者の多くは、依然として個人の主体性に大きく期待しているという点である。個人が社会に埋め込まれ包摂される形で主体的個人が形成されていた近代社会から、更に一歩進んで、個人は社会とは別のカテゴリーとして、独自の主体性を発揮しつつあり、またそれが求められているのだと言う。果たしてそうであろうか。

ギデンズやベックは、ある意味で近代的主体よりももっと個人にシフトした、いっそうの独自の存在としての個人主体に期待しているようである。社会に依存したり強制されたりするのではなく、近代人よりも更に自覚的な（彼らが「再帰的：reflexive」と呼ぶ）主体性を要請している。

ギデンズ＝ベック的な再帰的の主体は、そのつどの再帰的反省を通じて自己判断を下す主体ではあるが、この主体性は“そのつど”であり、“状況に応じて”であって、かつてのアイデンティティ人間に求められていたような、継続的な自己の“内的一貫生”とは異なる。状況に応じて適切な変容を自ら遂げることのできる主体であり、実際にはその主体の肝心の「中身」は論じられておらず、言わば宙ぶらりんの名前だけの主体である。

ギデンズはこのような主体を、自ら自身の“コーディネイター”であり“編集者”でもある主体と呼んでいるが、それがどのような主体であるのかについては明確ではない—期待値に過ぎないようにも見える。ベックもまた「疑似主体：準主体」（Quasi-Subjekt）という表現で逃げている—（ここでベックが言う準主体はセールの概念とは全く異なっている）。

ギデンズの「主体」（agency）には、何がしか、中身を問わない遂行者というニュアンスが感じられる。外見上は主体であり、確かに行為の遂行主体ではあるが、内面はブラック・ボックスである—ギデンズは同意しないだろうが。現実の観察によってその中身を求めるとすれば、個人化された消費の物質的欲望と心情的満足だけになるかも知れない。

現代人は、これまでの用語法で想定されてきたような、グルドナーが述べたような意味での

「精神的」なものを具備した「主体」であることをやめつつあるように見える。ベックは家族や階級などの近代のカテゴリーが「ゾンビカテゴリー」となっていると述べていたが、今や「主体」という概念そのものがゾンビカテゴリーと化しているのではないか。

## (2) 「主体」という構成物の“空虚”な中身

本節では、上述した近代の意味での主体の構成とその運命を、ルーマンの主体論に沿って整理し、近代の主体が置かれた現代的位置について再考しておきたい。

我々はここで、人間「主体」という概念が、ウェーバー＝パーソンズの意味での“主意主義的行為者”であり、また近代社会が求めた人間像であったということに留意すべきであろう。人間という存在が、もともと主体性を保有していると論ずることで、行為の原点を人間に求めることが可能になるが、それが時代の要請であったことは明白である。

産業社会の形成に向けて、自らの意志で前向きに生きることを求められる諸個人は、主体的であるべく教育され、そのようなアイデンティティを保持し、結果として近代産業社会の繁栄を実現することに貢献したはずである。

そう考えることで、人間中心の（あるいは産業労働中心の）社会を正当化することはできるが、ルーマンの言葉を借りるならば、「主体」という概念は近代社会の「奸計」である。

ルーマンは「主体概念を自己言及的システムの理論によって置き換えようとした」とも言われる。自己言及（自己準拠）というのは、それまでの自分自身に準拠しながら、自身との再帰的（反省的）関係において自らを更新する形で、自分を再生産することを意味している。

この場合、個人の意識システム（心的システム）と社会システムはどちらも独自のパフォーマンスを遂行するシステムであるが、両者は明確に区別されている\*。また同時に、意識システムは「主体」という特権的地位を喪失させられている。

\*社会システムはコミュニケーションを要素として、コミュニケーションの連鎖によって自己言及的（自己産出的）に再生産されるシステム（コミュニケーションのネットワーク）としてあり、一方、個人の意識システムもまた、思考・心情・意欲などを要素として、自身を再生産する自己言及的システム（意識のネットワーク）としてある。外に向けて発信されたコミュニケーションの連鎖によって成り立つ社会システムと、個人の意識内での意識の流れ（意識システムの再生産）とは、明確に区別されねばならない。

ルーマンの「意識システム」の理論が有する、本稿にとって重要な論点は、ルーマンが個人と主体を区別するその仕方である。

『社会学的啓蒙6』所収の「主体の奸計と人間への問い」と題する論文においてルーマンは、

「主体」(Subjekt) という概念は、人間主義が社会に立ち向かうための「共同謀議」の産物として、歴史的に形成されたものであるとしている。

「超越性に関わる古来の表象は、かつてはいつも宗教的に規定されていたが、カントによって主体に、そして人間に移し替えられた」—それに更に社会を付け加えたのがデュルケームであることはよく知られている。カント以降の思想的発展において「人間的個人を主体と名づけ、社会に対する一種の共同謀議において、主体という名を弁護し守るという慣行が残った」(Luhmann, 1995a, S. 157) とルーマンは述べ、それを主体の「奸計」(悪たくみ: Tücke) と呼んでいる。

「全ての未知のこと、不確かなことが、自由という形をとって主体に収納された」。そして「主体の名において…社会に向けた白紙小切手が交付される。主体は…社会の〈ユートピア〉(どこにもない場所)である」(ebd., S. 161f)。意識的存在としての人間を他の全ての存在者から区別する「主体」の論理において、主体の中身として充填されたのは「自由」という白紙小切手であった、というのがルーマンの見方である。

### 3. 「人間」の終焉論

#### (1) 「人間」はいかにして終焉させられたのか

社会学の学説・理論的には、個人が社会に包摂されていた位相(デュルケーム、パーソンズ図式)から、個人と社会が切り離されつつある理論段階(ルーマンの社会システムと意識システムの理論など)を経て、今、人間主体がモノと等値されるものとなりつつあるのではないか。その理論的筋道を本稿では辿ろうとしている。

だがその前にもう一つ、いわゆる「人間の終焉」という理論設定についても触れておかなければならない。脱人間の言語ゲームは随分と長い間、50年以上に亘って繰り返されてきた。構造主義やフーコー、ルーマン等々。だが、人間が何に置き換えられるのかという話はあまりされてこなかった。

「人間の終焉」論に対する反応の多くは、人間が経済や政治のシステムに支配されてしまうことへの危惧と批判の表明であり、単に「人間」を守りたかっただけであるようにも見える。1970年代からのハバーマスとルーマンの論争もその周辺で展開されていたと言えよう。グルドナーの指摘はそういう意味では、人間が何に置き換えられるのかを論じた早い時期の先駆的論考であるが、近年のフラット・オントロジーがようやくはっきりと、モノが人間と同等の存在であり、人間がモノに置き換えられるであろう可能性を示唆し始めたと言える。

人間の終焉について主題的に論じたものとしては、レヴィ＝ストロースの構造主義やフーコー、そしてルーマンなどがあげられるが、まずはフーコーの所論を辿ることで、終焉論の先を見通し

たいと思う。

フーコーはレヴィ＝ストロースの構造人類学に影響を受けつつ、その人間“解体”のプログラムを認めつつも、ある程度の距離を取り、構造主義のように人間を静的・記号的な構造に従属させるのではなく、主体がいかにして形成されたのかという、言わば知識社会学的な「知の考古学」を目指したことでよく知られている。

主体を構造に従属させた構造主義、主体の形成を歴史的に分析し、とりわけそれが権力の産物であることを明らかにしたフーコー、そして主体を差異に解消し、主体概念それ自体の脱構築を遂行しようとしたポスト構造主義があった。その後を受けて、我々はここで人間主体が新たに何に置き換えられようとしているのかを検討することになる。

フーコーの『言葉と物』のテーマは、物の認識にはそれに先立って一つの知の枠組み（エピソード）が必要であり、近代のそれは「経済学」「言語学」「生物学」の登場によって特徴づけられるのであるが、そこでは労働し発話する生の統一体としての「人間」という概念が要請されたというものである。

しかし「人間は…一つの発明品である。そして恐らく、その終焉は近い。…人間は浪打ち際の砂の顔のように消滅するのであろう…」(Foucault, 1966, p.398)。

但し、ここでフーコーがしたことは、決して（しばしばこの著作の主題とされる）「人間の終焉」(la fin de l'homme)ではなく、むしろ人間の「登場」である。フーコーはいかにして人間という概念が生まれたのかを執拗に論じているのであって、どのようにそれが消滅するかについては、あまりきちんとは論じていない\*。

\*『言葉と物』を書いた頃のフーコーは構造主義者を自任していたので、ここでは構造主義によって人間解体の第一歩が進められると想定されていたはずである。ただ、構造主義は主体を構造に従属させたのみである。これを更に進めて、続くポスト構造主義は人間主体の解体を進め、「差異」「差延」(J・デリダ)などの概念によって人間主体を完全に「脱構築」してしまった。

フーコーにおいては精神分析、民俗学 (ethnologie)、言語学が、「人間」を掘り崩してゆくという危惧が語られるものの、「人間」の終焉については、作られたものはやがて消えるという、やや印象的な記述が見受けられる。

「精神分析と民俗学は、人間という概念なしで済ますことができる」のであり、「人間を“解体する”ことをやめない」(ibid., p.390f.)。そしてこの二つの学問に形式的モデルを与える言語学は「精神分析や民俗学と同様に、人間そのものについては語らない」のであるから、「人間をその終焉に導く」のではないかと危惧されている (ibid., p.393)。

やや図式的に要約するならば、以下のようにまとめることができるだろう。労働し、発話する、生の統一体として要請された「人間」は、やがて労働の価値が衰退することでその地位が引き下げられる。そして（人間を超えた）言語それ自体の構造に従属することが明らかにされた後に、生命がゲノムへと解消されてゆくプロセスの中で、「人間」という総合物の不要性を宣告される。

社会学サイドからこの動きを跡づけるならば、そこには背景として、産業社会（人間主体の労働による価値創造）から情報化された消費社会（差異化された商品のシステムにおける記号消費）への動きと、それに対応したアイデンティティ（いつも同じ一つの自分）の流動化・多様化への道筋があったとすることができる。

## (2) システム理論的解消

フーコーの指摘をなぞるならば、「人間」という概念は、“労働し発話する身体”に名を与えるための、一つの“総合物”として登場したことになる。このような総合物としての「人間」を、フーコーとは異なったやり方で、システム理論的に解消したのがルーマンである。

ルーマンによる「主体」概念の批判については前節で触れたが、同じ文脈で「人間」という概念の不要性が主張される。

ルーマンにおいては、これまでの社会学や哲学・倫理思想に比べて「人間」あるいは「人間主体」の特権的地位は引き下げられている。あらゆるコミュニケーションは個々人の意識システムなしには成立しないから、人間なしには社会は存在せず、人間は社会が成立するために不可欠である。が、ルーマンは「人間」という概念の不当な人間主義化とそれによる社会概念の不透明化を嫌っている。

一般に社会は人間から構成されていると考えられてきたが、人間は社会の環境であって、しかも一つのシステムを形成してはいない。確かに社会システムには人間の生体活動が前提となっている。だが「人間」(Mensch)は単一のシステムではなく心的システム（意識システム）と生体システム（有機体システム、免疫システム等々）から成っており、また心的システムと生体システムはそれぞれ別個の閉じたシステムである。

ルーマンは「人間」と「パーソン」(Person：人物・人格)とを使い分け、社会システムと諸個人の間を関係を考える際にはパーソンという表現を用い、これに役割や期待の複合という意味を与えている。

「パーソン」は観察された心的システムであるが、これに対して、「人間」という言葉は「規範や価値についての人間主義的伝統」と結びついた概念であり、社会システム理論はこのような考え方とは一線を画さなければならない(Luhmann, 1984, S. 286)。

コミュニケーションによって成り立つ社会システムと、思考の連続としての意識によって成り

立つ心的システムは、「パターン認識」や言葉などのすべてにおいて接続し合っており、相互に浸透しているが、あくまでも別々のシステムなのである\*。「コミュニケーションがコミュニケーションするのであり、思考がコミュニケーションを行うのではない」。つまり、社会的なものとの心的なものは別個であり、社会的なものは心的なものによっては説明されない。

\*「人間という語に対応する〈まとまり〉(Einheit)はない。人間とか人とか人格とか主体とか個人とかいう語は、それぞれの語がコミュニケーションにおいて作動する側面を捉えたものでしかない」(Luhmann, 1995a, S. 52)。それゆえに「人間達はコミュニケーションすることができない。彼らの脳もコミュニケーションすることができない。意識でさえもコミュニケーションできない。コミュニケーションだけがコミュニケーションできるのである」(ebd., S. 38)。社会は外化されたコミュニケーションの連鎖によって成り立っているのであり、「人間」によって構成されている訳ではない。

ルーマンの用語法に従うならば、SF的なテレパシーでもない限り、意識や脳がコミュニケーションしあうことはないし、また現象学的社会学で想定されているような「間主観性」といったものも存在しない。

ルーマンは“社会が人間から成り立っている”というイメージが、社会的なものに関する伝統的観念の内に蓄積されていて、それが社会学上の認識論的障害物となっていると考えている。

#### 4. モノによる繋ぎ留め：モノの確かさ

モノ作りの文明（産業社会）は、実は精神的なものによって駆動されていた。その精神的なものが「社会的な」価値・規範として作動することで、諸個人は社会と結びつけられていた。改めて唱えるほどのこともなく明らかな道程であったとも言えるが、そのことを再認識しておく必要がある。

現代社会においては、「精神的なもの」の後退と「個人化社会」の到来で、社会と個人の結びつきは弱められつつある。それが「社会的なものの終焉」や「個人化」と言われていることの中身である。その結果、社会化と主体化によって密接に結合していた個人と社会は分離し始めていると言えよう。

だが個人と社会、個人と組織、個人と個人の分離は、ただでさえ複雑なコミュニケーションの複雑性をいっそう増大させる。ここでモノによる複雑性の縮減という機能が意味を持つ。モノによる置き換えという事態を、ルーマンはモノによる複雑性縮減というテーマに繋いでいる。

ルーマンがモノ・客体の意義を見直そうとするのは、M・セールの理論に依拠しながらである。「ミッシェル・セールも指摘していることだが、社会関係の安定化には、よく知られている社

会契約などよりも、客体による安定化のほうがはるかに役立つかも知れない」(Luhmann, 1995b, S. 81)。これは主として芸術の分野に関わってルーマンが指摘していることであるが、セールの準客体理論との関わりなどを考えれば、重要な意味を持っていると言える\*。

\*セールの議論は多岐にわたり、『パラジット』でのボールゲームを例にとった「準客体」論や、『五感』で述べるような触覚の回復など、様々である。このような立論の背景として、セールの場合には、例えば『五感』で指摘しているような、現代の情報社会への危惧が前提としてある。

近代社会の視覚優位がそれ以前の聴覚や触覚を後退させ、同時に主体と対象を分離させてパノプティコン的世界を招来したのだが、今や情報社会によって視覚の権威が失墜しつつあるとセール言う。世界中に張り巡らされたメッセージはもはや監視者を必要とはせず、また情報論的コードによって言語そのものも死に瀕していると見ている。

「我々は、感覚を失った後に、今度は言語を失おうとしている」。我々は必然的にデータに耽溺して生きているのであり、「この知的活動は麻薬の服用に等しい」(Serres, 1985, p.110)。いつも新しい情報を取り入れ続けなければならないからである。セールには、この流れに抗して再び触覚などの感覚を復権させたいという意図がある。

セールは『生成』の中で次のように述べている。「動物の社会と我々の社会の間に認められるただ一つの相違は…客体 (objet) の出現である。もし主体間の契約しかなければ、我々の関係、社会的繋がり、雲のように漂ったものとなるだろう」(Serres, 1982, p.146)。

セールのこの視点からルーマンが引き出したのは、“モノによる繋ぎ留め”とでも言うべき観点である。ルーマンはセールと同じ問題意識をもって議論を進めている訳ではないが、コミュニケーションにおけるモノの優位という意味では、セールと同様にモノの働きを見直そうとしていると言えるだろう。

セールを引用しながら、「今日では、コミュニケーション的調整は根拠づけではなく、モノに定位するということが理解され始めている」(Luhmann, 1995b, S. 125)と述べ、「モノへの定位」に注目しようとしている。「モノが同一であることが意見の一致の代わりとなる」(ibid., S. 124)のであり、そのことが「広範囲のコンセンサスの必要性」からの自由をもたらすものであるとも指摘している。

蛇足ながら、客体による社会関係の安定化というテーマは、実は社会学においても以前から示唆されている論題である。M・モースの『贈与論』はそのよい例である。“贈与”による社会関係の安定化とそのシステム論的意味については、[三上、2018]で詳しく論じたので、ここでは省略する。



## 中間考察のまとめに代えて

20世紀半ば以降、客体としてのモノを作る社会から、モノの消費にもっぱら注意が向けられる社会になったが、一時の「ポストモダン」の消費社会論では、J・ボードリヤールの理論がそうであったように、モノそのものではなく記号の遊動が重視され、記号的差異の創出と消費によって消費社会が生起しているという観点が優勢であった。

しかし、いわゆる「ポスト-ポストモダン」期になって、ポスト構造主義的な実体軽視と記号偏重の姿勢には疑問が呈されることになる。そして、モノそのものの存在感によって人間を世界に繋ぎ留めようとする動きが出始めてきたようである。

常に変容し、定まることのない記号的差異の世界では、個人はその活動を見定めることも「存在論的安心感」(ギデンズ)を得ることも難しい。ここに登場したのがモノの実在感である。これが近年のフラット・オントロジー台頭の背景にあると言えるのではないか。

前稿「[新しい存在論]を巡る社会学ノート」では、アクター・ネットワーク理論や「存在論的転換」、「準客体」の理論などについて、その理論内容を検討することを通じてモノ志向の新しい動きを確認した。

これを受けて本稿では、グルドナーの言う“精神的なものの、物質的なものによる置き換え”というテーマから入り、20世紀後期の社会学において、「主体」と「人間」がいかにしてその特権性を剥奪されてきたのかという理論史を辿った。

この作業は、グルドナー的意味での「置き換え」が大きく進展するプロセス自体を直接に論ずるものではないし、現代社会あるいは今後の社会において、脱人間とモノ志向がどのように進んでゆくのかというテーマを探るものでもない。

その点について詳しく論じるための理論的素材はまだ少ないが、次稿では、前稿ならびに本稿のこれまでの考察を踏まえた上で、フラット・オントロジーが持つ社会的含意についてより深く吟味し、現実に進行する情報化された個人化社会との関わりについて、もう少し理論的に立ち入った検討を行いたい。

## 【引用文献】

欧語文献からの引用文は、全て筆者が原典から訳出したものであるが、必要に応じて、代表的翻訳文献も参照した。

Beck/Beck-Gernsheim, 2002 : *Individualization*, Sage.

Dubet ,F., 1994 : *Scialogie de l'experience*, Seuil. 山下雅之監訳『経験の社会学』、新泉社、2011年

Ferraris, M., 2015 : New Realism, A Short Introduction, in F.Gironi et al. eds., *Speculations VII.*, punctum books.

- Foucault, M., 1966 : *Les mots et les chose*, Gallimard. 渡辺・佐々木訳『言葉と物』、新潮社、1974年
- Foucault, M., 1975 : *Surveiller et punir*, Gallimard. 田村 俣訳『監獄の誕生』、新潮社、1977年
- Gouldner, A., 1970 : *The Coming Crisis of Western Sociology*, Heineman, 1971. 岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』、新曜社、1978年
- Harman, G., 2018 : *Object-Oriented Ontology, A New Theory of Everything*, Pelican Books.
- Latour, B., 2005 : *Reassembling the Social, An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford Univ. Press. 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す』、法政大学出版社、2019年
- Luhmann, N., 1984 : *Soziale Systeme*, Suhrkamp. 馬場靖男訳『社会システム理論』(上)、勁草書房、2020年
- Luhmann, N., 1995a : *Soziologische Aufklärung 6*, 3. Aufl. 村上淳一訳『ポストヒューマンの人間論』、東京大学出版会、2007年
- Luhmann, N., 1995b : *Die Kunst der Gesellschaft*, Suhrkamp, stw. 9Aufl., 2017. 馬場靖男訳『社会の芸術』、法政大学出版社、2004年
- Meillassoux, Q., 2006 : *Après la finitude, Essais sur la nécessité de la contingence*, Seuil. 千葉・大橋・星野訳『有限性の後で』、人文書院、2016年
- Riesman, D., 1950 : *The Lonely Crowd*, Yale Univ. Press. 加藤秀俊訳『孤独な群衆』、みずさ書房、1964年
- Scheler, M., 1928 : *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, 7Aufl., Franke, 1966. 亀井・山本訳『宇宙における人間の地位』、白水社、2012年
- Schulz-Schaeffer, I., 2000 : *Akteur-Netzwerk-Theorie, zur Koevolution von Gesellschaft, Natur und Technik*, in Weyer, J. (ed.), *Soziale Netzwerk*, Ordenbourg Verl.
- Serres, M., 1980 : *Le parasite*, Hachette Littératures, 1997. 及川・米山訳『パラジット』、法制大学出版社、1987年
- Serres, M., 1982 : *Genèse*, Bernard Grasset. 及川馥訳『生成』、法政大学出版社、1983年
- Serres, M., 1985 : *Les cinq sense*, Edition Grasset et Fasquelle. 米山親能訳『五感』、法政大学出版社、1991年
- Strathern, M., 2004 : *Partial connections*, updated edition, Rowman & Littlefield. 大杉・浜田・田口・丹羽・里見訳『部分的つながり』、水声社、2015年
- Weber, M., 1904-1905 : *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Winkkelmann, J. (Hg.) *Max Weber Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus I*, 3. Aufl., 1973. 梶山・大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(上巻)、岩波書店、1955年
- 春日直樹、2011 : 「人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」、春日直樹編『現実批判の人類学』、世界思想社
- 三上剛史、2003 : 『道徳回帰とモダニティーデュルケームからハバースマールマンへ—』、恒星社厚生閣
- 三上剛史、2018 : 「贈る」行為の両義性—『贈与論』再考：モースからジンメルそしてルーマンを経由して—、『追手門学院大学社会学部紀要』、第12号
- 三上剛史、2020 : 「新しい存在論」を巡る社会学ノート—脱人間とモノ志向—、『追手門学院大学社会学部紀要』第14号